

ムクドリ 英: Grey Starling 学: *Sturnus cineraceus*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ムクドリ科

全長: 238mm (225-243)
 翼長: ♂ 128.9±2.8mm ♀ 124.9±2.6mm
 尾長: ♂ 65.9±2.2mm ♀ 62.5±2.9mm
 全嘴峰長: 26mm (24-27) ふしよ長: 30mm (27-31)
 体重: 86.3g (67.5-97.5)

※ 自然翼長と尾長は神奈川県相模原での計測値(♂272個体, ♀299個体). その他は, 榎本(1941).

羽色:

雌雄ほぼ同色. 背は黒褐色で, 腹は淡く, 頭頂, 翼, 尾は黒味が強い. 頭頂から頬に不規則な白色部がある. 全体に暗い色調の中で, 脚と嘴は鮮やかな橙色で目立つ. 腰は白色で, 飛んでいるときなどよく目立つ. 繁殖期にはオスは濃淡がはっきりし, 橙色も鮮やかになる. 一方, メスはオスに比べて全体にぼんやりした色彩となり橙色部分もそれほど鮮やかでない. 雌雄並んでいれば明確に区別ができるが, 色の変異の範囲が大きく, 単一の識別は容易でない.



写真1. ムクドリのオス(上)とメスと思われる個体.

鳴き声:

キュルキュル, ジャージャーなど, さまざまな声を出す. 後述のねぐらの追い払い等に使われている鳴き声はディストレスコール(遭難声)といって, 天敵に捕まったときに出す悲鳴である.

2. 分布と生息環境

分布:

日本と中国北部・沿海州(モンゴル, シベリア, 朝鮮)で繁殖し, 冬は中国南部・台湾・西南日本に南下. 日本では全国各地で留鳥として生息するが, 九州以南では多くない. 北海道では夏鳥であったが, 近年は道南や道央で越冬するものが増えている.

生息環境:

低地の平野や低山地にかけて広く生息し, 農耕地, 公園, 庭園, 牧場, 村落付近の林, 果樹園, ゴルフ場など人との生活に密接した地域によく見られる.

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 繁殖期 非繁殖期

繁殖期は3月下旬から7月で年に1~2回繁殖する. 一夫一妻だが, まれに一夫二妻あるいは一妻二夫が生じる. 越冬群の中で番の確認行動が見られることから, 繁殖にさきがけて番を形成しているものもあると思われる. 3月には好

4 適な巣場所を巡る激しい争いが観察される. また

営巣中は巣の周囲数mほどに排他的ななわばりを形成する.

巣:

疎林の樹洞や人家の戸袋, 建造物の屋根などのすき間, 石垣の間, キツツキ類の古巣穴などに, 枯れ草, 落ち葉などを敷き詰め, 羽毛, 獣毛, セロハン紙, ナイロン片などで産座を作る.

卵:

一腹卵数は4-7個. 第1回繁殖のほうが第2回繁殖より卵数が多い. 卵は薄い青緑色で基本的に卵形だが, 色や大きさ, 形に個体差がある.



写真2. ムクドリの卵.

抱卵・育雛期間:

雌雄で抱卵するが, 夜間はメスのみが行い, 約12日間で孵化する. 育雛は雌雄共同で行い, 約23日で巣立つ. 巣立ち雛はその後, 親とともに家族群で行動するが, 約1ヶ月後には独立して若鳥群で採食したり, 成鳥とともに集団で夏ねぐらを形成する.

ねぐら:

ムクドリの集団ねぐらは, 大きく夏ねぐらと冬ねぐらに分けられる. 夏から秋にかけての夕方, 就寝前行動として, ねぐらの上空を大群で飛び交うさまは圧巻である. かつて夏ねぐらは郊外の笹藪や雑木林, ヨシ原などであり, ヨシが枯れたり雑木林が落葉したりすると, 冬ねぐらとしてまとまった竹林がそれに代わって利用されていた. しかし, 近年は夏ねぐらの多くは郊外ではなく, 都市部, 特に駅前の街路樹が多く使われるようになり, そのため騒音と糞害などにより, 人との軋轢が生じ, 様々な方法で追い払いが行われている. その結果, ねぐら場所が落葉樹から常緑樹そしてビルの屋上の看板や電線などの人工物に移動する例が増加しつつあり, 夏ねぐらと冬ねぐらの区別がなく, 夏から冬まで同じ場所でねぐらをとる例も増加している.

4. 食性と採食行動

雑食性で, 動物質ではミズや昆虫を食べ, 植物質では初夏には桜の実, 秋にはハナミズキ, エンジュ, ネズミモチなどの木の実を食べる. 果樹のモモ, ナシ, ブドウ, リンゴ, カキなども食べるが, かんきつ類は食べない. 秋, 冬には大群で農耕地に下り, 地上を交互歩行しながら, 土の中に嘴を差し込むようにして畑や草地の昆虫などを食べる.

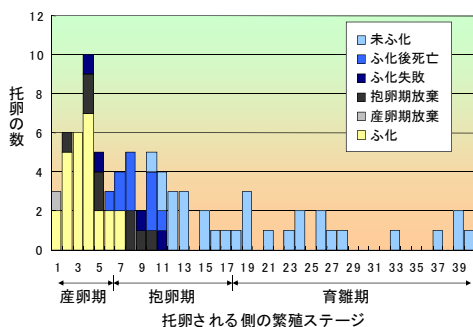
5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 種内托卵

自分の卵を他の種の巣に産みつける托卵を行う鳥はカッコウやホトギスなど日本では4種ほど知られているが, 同じことを同じ種の中で行う場合を種内托卵と呼び, この場合も托卵と同様に, 抱卵も育雛も全て他人任せとなる. 種内托卵をする種は全世界で200種を超え, さらに多くの鳥が種内托卵をしているものと考えられており, 日本ではムクドリがこの種内托卵をすることが分かっている. 神奈川県相

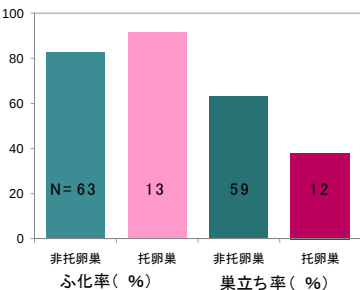
模原市のゴルフ場内に巣箱180個をかけ、そこで繁殖するムクドリについて調べたところ、約2割の巣で托卵が起こっており、種内托卵する他の鳥と比べても高い頻度であった。托卵される側(以下、宿主)の繁殖ステージが産卵期か育雛期の初期に托卵された卵では、通常の卵と比べて孵化率は変わらず、孵ったヒナが巣立つことも確認した。抱卵期前期に托卵された卵は、孵化するものの、宿主の他の雛と比べて孵化日が遅いことにより、体が小さく数日で死亡するものが多かった。抱卵期後期以降に托卵されたものは、抱卵日数が足りないため、孵化しなかった(図1)。托卵する側としては、宿主の産卵期に托卵する必要があるが、抱卵期に入っても托卵が行われており、宿主を観察して適切な時期に托卵するというより、場当たりの印象が強い。

図1. 托卵される側の繁殖ステージにおける托卵数と托卵のその後 (Yamaguchi & Saitou 1997より作成)。



次に宿主にとって托卵されることは、自分の卵より多い数の卵をあたため、多い数のヒナを育てなくてはならず、何らかの影響を被っていると考えられる。托卵されなかった巣と托卵された巣で、孵化率と巣立ち率を比較した。孵化率は有意差がなく、どちらも高く、抱卵に及ぼす影響はないと考えられたが、巣立ち率では托卵された巣で有意に低くなり、育雛については大きな影響があり、托卵された巣では、巣立ちさせるヒナの数が少なくなっていた(図2)。

図2. 托卵された巣と托卵されなかった巣における孵化率と巣立ち率 (Yamaguchi & Saitou 1997より作成)。棒の中の数字は巣数。



このような負の影響があるため、托卵を防ぐ行動の獲得が考えられる。托卵を防ぐためには、托卵された卵を見破って巣から除去することや托卵されないよう防衛することが考えられるが、そのような行動は見られなかった。

托卵する個体であるが、実験的に巣箱の数を少なくし、巣箱で繁殖出来ない個体を多く作ったところ托卵される巣の割合が増加した。このことは、繁殖できる状況にありながら、巣場所の問題などで繁殖できない個体が種内托卵をしているかもしれないことを示唆している。

● 人との関わり

古くは田畑にて害虫を多く食することより益鳥とされていた。しかし、1960年代以降になるとナシへの被害が問題になり、他の果樹にも被害を出すようになったことから現在で

は害鳥と位置づけられることが多い。近年では、農作物への被害より、都市部でのねぐら問題が大きく、毎年のように夏から秋にかけてマスコミが取り上げている。駅前の街路樹などでは、大規模枝打ち、ネットかけ、ディストレスコールなどにより、強い人為的圧力をかけ追い払っているが、その移動先は郊外ではなく近くの別の街路樹や人工物、あるいは他の自治体の駅前であり、ねぐらを分散させ、事態をより悪化させていることが多い。初めにねぐらが出来た自治体や付近の住民にとっては、そこからいなくなるのが解決のように思われるが、もっと広域に考えるとそれは解決ではなく問題の転嫁でしかない。最近では、一部の自治体では全てのムクドリを追い払うことはせず、被害のひどいところだけを排除し、比較的被害の少ないねぐらは残していくような共存の道を模索している。

● ギンムクドリとの雑種

日本では、ムクドリ科はムクドリ以外に主にギンムクドリ、シベリアムクドリ、コムクドリ、カラムクドリ、ホシムクドリが観察されており、ムクドリとギンムクドリの交雑個体と思われる羽色を持つ個体が観察されていた。2009年、高知県宿毛市において、ムクドリの雌とギンムクドリの雄が同じ巣穴に入り、雛への給餌も確認され、交雑個体と考えられる巣立ち雛がこの巣穴から出てくるところも確認された。宿毛市においては、2007年からギンムクドリが確認されており、両種の生息環境や生態が重なることから交雑しやすい状況にあったと考えられる。今後、ギンムクドリに限らず、他の地域でもムクドリ科内における交雑個体の出現に注視したい。

6. 引用・参考文献

- 榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部. 大阪.
 越川重治. 2006. 駅前のムクドリの集団増殖は何故、増えたか。一安易な追い払いが駅前増殖や人工物増殖を増やす。Urban Birds 23:27-40.
 齋藤隆史. 1986. ムクドリにおける一繁殖期内の一夫二妻あるいは一妻二夫鳥類の繁殖戦略(上)(山岸哲編), pp107-129. 東海大学出版会, 東京.
 佐藤重徳・木村宏・平田幸・岡井義明. 2010. 高知県宿毛市におけるムクドリとギンムクドリの異種間つがいによる繁殖事例. 日本鳥学会誌 59:76-79.
 Yamaguchi, Y. & Saitou, T. 1997. Intraspecific nest parasitism in the grey starling (*Sturnus cineraceus*). Ecological Research 12:211-221.
 Yamaguchi, Y. 1997. Intraspecific nest parasitism and anti-parasite behavior in the Grey starling, *Sturnus cineraceus*. Journal of Ethology 15:61-68.
 Yamaguchi, Y. 2000. Parasitism strategy of the grey starling, *Sturnus cineraceus*: Selection based on host characters and nest location. Ecological Research 15:113-120.

執筆者

山口恭弘

(独)農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業総合研究センター・鳥獣害研究サブチーム



自宅の隣の雑木林で娘の紬実(3か月)と一緒に。

ムクドリは大学院時代の研究テーマでした。繁殖期は朝から日が暮れるまで調査漬けの毎日で大変でしたが、今考えると、何も考えずに研究に没頭できる環境の貴重さを感じます。いつまでも探求心を持って研究を続けていけたらと思う今日このごろです。